Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ムージルにおける終わりなき省察の行方 : 言語表現の可能性を求めて |
| Author(s) | 北島, 玲子 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/49133 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【46】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 北　島　玲　子（きた　じま　れい　こ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２１６３１　号 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平成 19 年 11 月 30 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第４条第２項該当 |
| 学　位　論　文　名 | **ムージルにおける終わりなき省察の行方－言語表現の可能性を求めて－** |
| 論 文 審 査 委 員 | （主査）<br>教　授　林　　正則<br>（副査）<br>教　授　和田　章男　　准教授　三谷　研爾 |

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は､20 世紀ドイツ語圏の文学世界にもっとも重要な位置を占める作家のひとりローベルト･ムージル（Robert Musil 1880-1942）の長編小説『特性のない男』を中心に、ムージルが言語への深い懐疑から出発しつつも、逆に言語の否定性を梃子に文学テクストの可能性をいかに執拗に追求し続けたかを明らかにしようとした試みである。全体は序、５章からなる本論、結語で構成され、註、参考文献を含めて A4 判 217 ページ（400 字詰め原稿用紙換算で約 650 枚）である。

まず序では、言語と認識への懐疑に色濃く染め上げられた 20 世紀初頭の文学状況が、本論文の問題設定の背景として素描される。文学がそれまで保持してきた他の言説に対する特権性、さらには言語そのものが他のメディアに対して確保してきた優位性が大きく揺らいだ時代状況を踏まえた上で、ムージルのテクストを M. フーコーや F. キトラーのディスクール分析、メディア論の観点を援用しつつ、文学言語のもつ表現可能性を改めて問い直すという、本論文の目的が明らかにされる。

第一章では、ムージルの最初の小説『生徒テルレスの惑乱』が取り上げられる。論者は、主人公テルレスが経験する精神の惑乱を、言語と認識の問題にほかならないとする。ニーチェの認識批判・言語批判を参照しつつ、言語とは本来同一ならざるものを架橋する比喩であって、比喩から成り立つ既存の了解枠から逸脱したときに世界が不可解なものに変貌する経緯をテクストにそって明らかにしてゆく。そして、『テルレス』において提出された問題、「言語によっては架橋不可能なもの」、「イメージを結ばないイメージ」、「言語の他者である沈黙やざわめき」の問題を言語によって浮上させるというアポリアに満ちた試みが、以後のムージルの課題となったとする。

第二章では、ムージルの認識批判・言語批判が、「可能性感覚」という概念で表象されるユートピア的志向とどのように結びついていたかが、『愛の完成』、『トンカ』の二編の短編小説を通して検証される。ムージルの「可能性感覚」は、確かなるものの根拠を徹底的に問い直すことにほかならないが、それはまた不可視なものへのユートピア的まなざしを可能にするものでもある。論者は、こうした視点の転換がムージルにおいてはもっぱら愛の問題、とりわけ「合一」というユートピア的な愛の探求に収斂してゆくこと、そこに開かれる「場」をこそムージルが自己の文学の根拠としていることを確認する。

第三章では、ムージルが映画というメディアに、慣れ親しんでいた連関から世界を引き離し、安定した生の連関全体に裂け目を入れる媒体として重要な意義を見出していたこと、そして新しいメディアがもたらした知覚の揺らぎに触発されつつ、「生の根源的な状態」としての比喩の原理によって「硬直化した比喩」をいかに乗り越えようとした

かが、短編小説『静かなヴェロニカの誘惑』を通して検証されている。

第四章では、象徴的な秩序に組み込まれた言語に依拠する文学が、言語の他者である沈黙、あるいはざわめきと接点をもつことによってどのように変質したかが、音にまつわるテクストである『黒つぐみ』を例に、メディア論の視点から検討されている。論者は『黒つぐみ』を、ロマン主義的文学が「自然の声、母の声」を発見することで覆い隠してしまった「白いざわめき」（キトラー）をロマン主義的な舞台装置を通して感取させる「誘惑的な」テクストであるとする。

第五章は、本論文の中心部分をなす『特性のない男』論である。この作品の第一巻では、「可能性感覚」によって導かれるユートピアへの志向を示唆しつつ、ヨーロッパの文化・社会・歴史の大規模な検証が企てられているのに対して、第二巻ではそうした企ては次第に背後に退き、ウルリヒとアガーテによる愛のユートピアの探求に焦点が合わされてゆく。この作品のそれまでのテクストとの決定的な違いは、現実批判・愛の探求が時代のディスクール・既存の言説との批判的対決という形で行われる点である。ウルリヒとアガーテは現実を超出しようとする自分たちの体験を、既知の言説との関係を意識しながら、しかもそれとは異なる形で言語化しようとする。反復されない「ただ一度きり」のものを、反復性に立脚する言語によって表現しようとする困難な試みは、二人の関係を一種の袋小路へと導く。二人が現実への通路も、レアールなものへの通路も断つことで、愛についての省察を果てしなく続け、その結果『特性のない男』がこの上なく壮大な断片に終わらざるを得なかった経緯が明らかにされる。構想段階では非常に大きな役割を果たしていた理性の他者、言語の他者を体現するクラリセとモースブルガーの物語が次第に背景に退き、ウルリヒとアガーテの場合と同様、最終的にはレアールなものへの志向は失われ、身体性を欠いたユートピアが志向されているということは、言語の他者を意識しながらも言語化によって世界と対峙するしかないとを見定めたムージルの断念に他ならなかったと、論者は述べる。

結語は、『特性のない男』の一見不毛に思える終わりなき省察、すなわち肯定的なもの、確固としたイメージをうち立てるのではなく、つねに語ったものの根拠を掘り崩す終わりなき省察、それこそが文学の言語によってのみ果たされうる未踏の試みであり、文学言語独自の表現可能性を拓くものであると結論づけている。

## 論文審査の結果の要旨

ローベルト・ムージルは、言語と認識への懐疑に色濃く覆われた 20 世紀初頭のドイツ語圏の文学世界において、言語表現に対するペシミズムから出発しながらも、その研ぎ澄まされた感性、対象への厳密で仮借のない視線、透徹した内省、そこから紡ぎ出されてくる硬質な輝きを秘めた文体、比類なく明晰かつ深遠な言語表現をもって、トーマス・マンと並んでもっとも重要な位置を占める作家のひとりである。本論文は、ディスクール分析からメディア論へと展開した 80 年代から 90 年代にかけての現代思想の動向をにらみながら、一方では言語のもつ否定性、権力性を徹底的に暴きつつも、他方では世界と対峙するにはそれを言語化することによるほかないと見定めて、文学の言語しか持ち得ない独自な表現可能性を執拗に追い求め続けたムージルの軌跡を、中編小説『生徒テルレスの惑乱』に始まり、短編小説『愛の完成』『トンカ』『黒つぐみ』を経て、死によってついに未完に終わった長編小説『特性のない男』に至るテクストを辿りながら丁寧にあとづけた我が国では最初の包括的な作家研究である。

本論文の最大の功績は、膨大かつ難解なムージルの作品群を、刊行に至らなかったヴァリアントまで含めて緻密に読み解きながら、ムージルのテキストの稀有な魅力を見事に浮き彫りにしている点である。ムージルが作家としての出発から生涯の最後に至るまで一貫して取り組んだ「言語（＝比喩）で表現しえないもの」を「言語でもっていかに表現するか」というアポリアに満ちた文学的営為は、きわめて難解なテクストの数々を生み出した。彼のいわば「物語を解体する物語」は、終わりなき省察の果てに、破砕された現実の無数の細かな破片の集積と化するかに見えて、その無数の破片からいわば乱反射する光の交錯のなかに「愛の合一」という「ユートピア的風景」を浮かび上がらせる。読者はそこで、「真夏にどこからともなく運ばれてくる雪のひとひら」とも呼ぶべき、日常性のなかに置き去りにされ忘れられたもの、実在せぬもの、夢の予感の中で消し去られてしまったものと出会うと、論者は言う。きわめて哲学的な問題と深く切り結びつつ、自身の鋭い文学的な感性と文学への志を強く滲ませている論述を通して、論者

はムージル文学への核心を明確に見据えながら、現代文学、あるいはそれを超えた文学一般の根源的な問題を炙り出している。

ただ、テクスト分析にあたって援用されているタームのなかには、現代批評の議論のさなかから生まれた、修辞性に富んだものも散見される。それらについて、ムージル文学に即してさらに明確化が図られれば、いっそう彫琢の深い論述になったと思われる。また、ムージル文学の大きなテーマである「愛」の問題については、その観念も実相もややアプリオリなものとして扱われている感があって、もう一歩踏み込んだ説明を聞きたかったというのは望蜀の嘆であろうか。とは言え、それらは本論文がムージル研究において果たした多大な寄与をいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。